

第3回宇治市スポーツ推進審議会

議事要旨

宇治市

第3回宇治市スポーツ推進審議会 議事要旨

〈開催年月日〉

令和3年10月13日（水） 9時30分～

〈開催場所〉

オンライン会議

〈出席者〉

➤ 委員

長積 仁（会長）	立命館大学 スポーツ健康科学部 教授
佐野 恵理子（会長職務代理）	（一財）宇治市スポーツ協会 理事
上林 功	追手門学院大学 社会学部 准教授
小川 雅洋	（株）京都パープルサンガ 地域連携本部長
小西 美加	京都文教大学 女子野球部総監督
佐藤 朋子	宇治市スポーツ少年団 本部委員
多田 重光	（公社）宇治市観光協会 専務理事兼事務局長
西山 正一	宇治市体育振興会連合会 副会長
森 美奈子	摂南大学 農学部食品栄養学科 講師

計9名

➤ 事務局

脇坂 英昭	産業地域振興部 部長
荻野 浩造	産業地域振興部 副部長
久泉 昭人	産業地域振興部 文化スポーツ課 課長
萬谷 智	産業地域振興部 文化スポーツ課 スポーツ係 係長
小森 一範	産業地域振興部 文化スポーツ課 スポーツ係 主任

計5名

〈会議内容〉

1. 開会

- 会議録の公開についての説明
- 欠席委員の報告
- 事務局職員紹介

2. 会長あいさつ

3. 議事

- 実態調査（アンケート）結果に基づく課題について

（会長）

アンケート結果は宇治市の実情を表したものになる。スポーツの好き嫌い、情報の経路など、様々な特徴がみられる。課題に対する解決策、改善策を考えなければならない。

- 次期宇治市スポーツ推進計画素案について

第3回宇治市スポーツ推進審議会 議事要旨

(会長)

我々が考えなければいけない方向性は、今見えている課題の解決策だけにとどまらない。今検討されている宇治市の総合計画や様々なことに連動する政策を描くだけではインパクトが薄くなってしまいますので、ハッとするような新しいアクションをこの政策の中に盛り込んでいきたい。12年間を見据えた計画を考えていく時に、ここに無い未来を生み出す、新しいことに投資をしていく視点を持ち、また、国や社会の動向をとらえた計画にすべきであるとする。

スポーツ庁ができ、単なるスポーツ振興にとどまらず、スポーツが基軸となりながら、まち、ひと、仕事、産業を創っていくという視点を実現されようとしている。第2期のまち・ひと・しごと創生総合戦略、スポーツと健康のまちづくりを見据えた仕掛けを打ち出し、地域のスポーツコミッションのような新しいことを仕掛ける、行政組織とは分割されるような組織体を作るべきだと思う。

スポーツ基本計画でも、スポーツの広がりはかなり広く描かれている。国が掲げているようにスポーツで人生が変わる、社会を変える、世界とつながる、未来をつくるということを踏まえないわけにはいかない。

スポーツ実施率の向上のために様々な政策が打たれている。それはスポーツを楽しむだけでなく、スポーツの持っている価値をいかに享受するか。スポーツを通じ生きがいややりがい、幸福感をいかに創造するか。単にする・みる・ささえるだけでなく、スポーツに幸福感がどう関わっていくのかも考えるべき。

障害のある方のスポーツの活動を支援する。もちろん障害のある方だけでなく、女性や高齢者、いろいろな方に対するダイバーシティ、インクルージョンも社会で取り上げられている。スポーツが誰のためのものか考えた時、ダイバーシティ、インクルージョンは外せない言葉だと思う。

大規模な国際スポーツイベントの開催などは、スポーツに関する様々な事業のほか、商工会や観光業も関わる。スポーツツーリズムが宇治市のまちづくり、産業へどのように波及性をもたらすのかも考えるべきだろう。

既定の枠組みでスポーツを捉えるのではなく、新しいスポーツ種目の増加や、スポーツに対する新しい価値を発信していくことを取り入れるべきだと思う。また、SDGsの視点を、スポーツが中心となりながら宇治市の様々な事業や産業部局に横串をさすテーマとして使いながら、スポーツ政策を打ち出せないか。

新型コロナウイルスの感染拡大で日常が変わった。市民スポーツのあり方、スポーツと人との距離感、関係性の変化にもくまびを打つべき。

技術とスポーツの融合を見据えた計画にするべき。

最後に、スポーツは「学ぶ」という教育的価値もあると思う。スポーツ版のSTEAM教育を打ち出す。これは教育行政や産業、サイエンス、宇治市の持っているコンテンツにSDGsと同じように様々な横串をさすキーワードになるのではないか。

今回のスポーツ推進計画策定の方向性は大きく2つある。1つ目は現状を踏まえ、宇治市が抱えている社会問題をいかに解決するか。向き合えなかった部分に向き合うことで、問題点を解決するためのくまびを打つ視点。もう1つは、12年先を見据えた時に、宇治市が新しい社会を見せる様な、市民に期待やわくわく感のある未来を生み出す視点。その2つの視点から政策を語っていきたい。

第3回宇治市スポーツ推進審議会 議事要旨

(委員)

素案の基本理念にSDGsならびにSociety 5.0やDXの観点を入れてもらったのは非常に素晴らしい。アンケート調査結果「今行っている運動・スポーツの種類」で「筋トレ」などがあるが、一番行われているのは「歩く・走る」。スポーツを行っている場所も自宅やその周辺。スポーツはここ近年の動きから見てもパーソナル化が進んでいる。産業革命以降のSociety 3.0と呼ばれる社会においては、皆で同じことをしようとする、平準化することによって社会利益を得る流れであったが、情報化社会により個性の門戸が開いてきた。個性を活かしながらみんなで楽しめる社会が出てきた。その場所に行かなくても共通のオンライン上で競えるeスポーツや、Society 5.0でいうフィジカルとバーチャルの融合は、まさにそういうところ。インクルーシブの社会でも、それぞれの個性を活かしながらそれぞれの立ち位置をうまく活かせる社会となると、これまでの皆で一律の大会や活動をするというつなげ方、広げ方では駄目だと思う。「たのしむ・つなげる・ひろがる」これはまさに個性ひとりひとりが輝く「伝統と新たな息吹をつなぐまち」という目指す都市像に叶うものだが、個性の部分をどう活かしながらつなげていくのか、具体的な取り組みの話に、どちらかというに従来通りのままなのではと少し引っかかった。デジタルの取組はそれを解決する1つの方法かもしれないので、もう少し突っ込んでいきたい。それぞれで楽しみながら実は全体で運動量上がる様なeスポーツなども個性とつなげる、個性と広がるところが相反しないことを含めたい。

(会長)

皆という時間と一人の時間が使い分けられていき、一人の時間も楽しめることは、一人ひとりの満足度の高まりにもつながる。個性をどうつなげていくのか、どう広げていくのか考えていく視点、非常にありがたい意見。

(委員)

他市町村でも始めている健康ポイントについて。今、導入されている健康ポイントはもらえばなしだが、それだと慣れて継続しないというアンダーマイニング効果が報告されている。そこで、例えば健康ポイントをスポーツの二極化の解消のために、参加するだけでもらえる参加ポイントと歩数ポイントを大きく分けて、たまったポイントを、宇治市内協賛店を募りクーポン券を発行し、そのクーポン券の一部を寄付行為につなげ、子どもの貧困対策に売り上げの一部を寄付していただく形にするなどはいかがでしょうか。企業では協賛メーカーを募り社員全体の歩数ポイントの一部寄付していただく。市民全体では皆で歩いた、もしくは参加したスポーツポイントをサイバー空間、クラウド上で表示して確認できるようにするとどうかと思った。

(会長)

歩くことが目的で延長線上にポイントがある。ポイントをもらってよかったと思うが、もらうことに慣れてしまうと何が目的だったかわからなくなる。寄付行為などの利他性を生むことで広がりを持たせることを既存の枠組みにテコ入れをしてうまく機能させるという例だったと思う。

(委員)

第3回宇治市スポーツ推進審議会 議事要旨

アンケート結果では、20～40代はボランティアへの参加意欲があり、SNSやホームページでの情報を待っている、50～60代はその方々と交流すれば自然に健康になって情報収集ができることからスタートしている。現代の方は交流の場が少ないと思っていると思う。それを創るのが、私たちや宇治市の総合計画を作っている方々だと思う。年齢・性別・国籍の壁がなく交流できる場所とイベントを定期開催する必要がある。どれだけいいものをつくりあげても、発信力や集客力がなければ人を集めることはできないので、そこでぜひアスリートの力を借りてほしい。SNSはある程度発信力があり、色々なつながりを使うことができる。宇治という言葉知らない人は日本にいないと思うので、それを京都の伝統として世界発信したいと思う。私は京都市で生まれたが宇治を誇りたいし、京都府民で宇治と一緒に盛り上げようと言われて、嫌がる方はいないと思う。京都府民のアスリート、引退されたアスリートがイベントを実施・参加すれば、市民の方々もいろんなスポーツにふれあう機会ができるのではないかな。そのイベントのボランティアを学生や高齢者の方にお手伝いいただき運営すれば、子どもから高齢者まで交流できる場ができるのでは。先程、12年先のあり方とあったが、未来の形としては、大人がミーティングできる場と子どもの遊び場が一緒になった、駐車場と飲食店付きの施設があれば最高だと考えている。

(会長)

イベントに限らず、人が集って、そこでいろいろな情報が発信されることは大事だが、場を創造しても、そこに人が足を運んでくれないといけない。発信力と集客力をアスリートの力を存分に使ってという話だった。例えば野球をしている人が野球だけの発信ではなく、意外なところに関わったり発信をしていくと、広がりを生むことができるのではと思った。

(委員)

今、SDGsも取り上げているが、皆が幸せになるということで、17の目標のうちいくつかは地域が絡んでいる。小学生がスタジアムの芝生の上で走るなどのイベントをした際、親子が笑顔になるのは、プロのチームと、スタジアムという非日常の空間が日常に変わっていくと習慣性が増してきたり、幸せな気持ちや心の動きあると思った。チーム京都コンソーシアムとして、京都府全体でプロサッカーチームの京都サンガF.C.を中心に盛り上げながらスポーツを、府民の幸せを、ということを少しずつしている。ボランティアに参加する方もだんだん増えている。まちが誇るチームをみんなで支えている。する・みる・支えるの、支える人の部分も、今盛り上がっている。宇治市として“宇治”という響きがもう少し外に出るといい。スポーツをどう融合させるかは、地域の人々がどこまでその意識を持つのか。サンガの選手、ブランドを上手く活用し、イベントで集客の部分を支えるところはあると思うし、協力できるところは全面的に協力しようと思っているので、我々を使えるところがあればお声がけいただければ。

(会長)

宇治市が持っているブランド力をどう生かすのか。今まで築かれているブランドに甘んじるだけでなく、新しい視点でのブランドを作る発想も大切。非日常と感じるところに様々なコトを起し、日常化するためのスタイルを作ることが政策に反映されるといいと思った。

第3回宇治市スポーツ推進審議会 議事要旨

(委員)

宇治川マラソン大会など、何十回も続いている大会については、遠方から来られる方もいる。遠方から来られると、それが観光や宿泊につながる。見るだけの観光から、体験する観光に代わってきている。観光の観点から音楽観光やスポーツ観光など、取り入れて行っているところもあるので、大会を継続して誰もが参加できるものがあれば、増やせればと思う。

(会長)

例えば、宇治市の中では京都大作戦の様な既存のイベントは大きな経済効果をもたらす。ドラゴンボートや宇治川マラソン大会など既存のイベントをどう発信しなおすのか。いつも同じ人が参加、同じ人しか知らないのではなく、関わり方や見せ方を変えることによって、リフレッシュしてイベントの魅力をさらに打ち出すこともできると思った。

(委員)

情報発信について。スポーツに関わる団体が地域にたくさん発信する活動をすれば良いと思う。それを行政がサポートしていく。違う団体とコラボレーションするなど。アンケートでは発信が求められる、交流が求められるという言葉で締めているが、どういう発信の方法があるかも考えて進めたい。地域の体育振興会の運動会で、子どもからお年寄りまで1200人ほど来られる。競技に参加されるだけでなく、個人の運動で近くを歩く、数人で集まって歩く工夫をすると健康にもつながる。ふるさとづくり、自分のふるさとを大事にしたいという気持ちは結びつくと思うので、情報の発信は各種団体もしなければならないが、行政も何かやることを考えないといけない。宇治市というネーミングを上手く活用し、観光事業、産業に結びつくような良い案は何かないか。

(会長)

身近に故郷を感じる、歩きたくなるような町にすることは、宇治市全体の景観整備にも関わると思う。自分たちの住んでいる日常で健康増進が取り入れられればいい。もう1つ聞きたいが、防災という視点はまちづくりには外せない。防災とスポーツや、防災と健康づくりなど、防災と連動させるようなくさびをこの政策に打てないか。人々の防災に関する関心はとても大きいので、接点やヒントはないか。

(委員)

町内会や自治会には入らないが、防災訓練には参加する人が多い。防災という名前を使った行事をすると人が集まる。それによって顔見知りになる。日々の防災活動の中から、スポーツとの関わりの前に、顔見知りになることが一番だと思う。今考えているのが、宇治市の歩いてまわるウォークラリーの際、災害が発生した場所を見ることも、防災意識が広がるのではないか。現場を見ることで防災に対する発想が出ると思う。ただ旧所・名跡を見るだけでなく、そういうことも少し入れていただければ1つのテーマになると思う。

第3回宇治市スポーツ推進審議会 議事要旨

(会長)

町のことを知る、考えることをどう仕掛けるのか。そういう発想があれば防災と健康づくりやスポーツは十分連動させることができると思った。

(委員)

高校の授業等でもeスポーツなどが組み込まれているところもあると聞く。宇治市にも組み込めたら良いと思う反面、eスポーツだと若い世代で広がりすぎて、地域の縦のつながりが薄くなってしまわないかという危惧もある。スポーツ版のSTEAM教育については、子どもも、大人でも好奇心旺盛なので楽しいだろうと思うが、まず地域での顔見知り広がれば一番強いのではないかと。昔のような餅つきや、どんど焼きをしている地域もあるので、そういうもので地域の人を取り込めるようにならないか。インフルエンサーの方が来てくれるだけで、地域のイベントが盛り上がるのではないかと。定期的に影響力のある方が地域の今まであるイベントにも参加してもらえれば、盛り上がり方が変わるのではないかと。どんな金額や形で呼べるのか、来てもらえるのか、一般市民が分かればもっと盛り上がるのではないかと。思う。

(会長)

eスポーツは若い世代だけではなくて、高齢者との交流にも使われている。反応系だけでなく、考えたりするなど、ゲームの種類を選べば全然対等にできる。そういうイメージも変えていければいい。子どもも大人も、自分たちを内発的に動かすことは知的な好奇心である。知らないことを知ったり、わくわくする瞬間をたくさん作る。我々が当たり前のことを当たり前にするのではなくて、STEAM教育のような知的な好奇心をあおるきっかけがうまく与えられたらと思う。

(委員)

情報発信について。体育指導委員からスポーツ推進委員に、体育協会がスポーツ協会に名称変更があった時点でそれをうまく利用して、情報発信を進めていかないといけないと思った。小さい子どもから色々なことを教えてスポーツをしていかないといけないが、運動することすべてがスポーツではないことは、eスポーツが始まってから認知されてきた。スーパーのゲームセンターも平日は高齢者でうまっているとテレビで取り上げられるくらい、高齢者の方も機械に順応されている。高齢者福祉施設でもそれで認知症対策をしている施設もある。

ボランティアをやりたい人がこんなにいるということがアンケートで分かった。20～40代の方が多いのは本当にありがたいし、使わない手はない。それを宇治市スポーツ推進計画の中で盛り込んでいきたい。

八幡市では企業と協力して歩数ポイントを実施している。今までポイント加算はもらいっぱなしだったが、今年度からは、地域の小学校へ寄付ができたり、歩数を確認する際に健康に関する情報を発信して、情報を目にする機会を作っている。

就学前の子どもを、いかに運動する子に育てるかが大事だと思う。親が子どもと一緒に虫取りすることも運動になるということを理解しないと。いけない。

コロナが流行してから、アンケート結果にも出ていたが、施設で運動しなくなったり、プールや体育館が閉鎖された。12年先を見据えたスポーツ推進計画では、いろいろな状況下でも身体

第3回宇治市スポーツ推進審議会 議事要旨

が動かして健康寿命を延ばせることに重きを置くべきだと思う。

(会長)

就学前の子どもの運動習慣をどうつけるかは、その後の体力形成にすごく関わってくることで、子どもに対するアプローチだけではなく、保護者の価値観を変えていくことも重要。身体を動かし続けていくことができ、健康寿命を上げて豊かな人生を送ることは、ウェルビーイングにもつながる。身体を動かし続けられる環境づくり、町の魅力を高めるための集客力・発信力の強化、非日常を日常に変える仕掛け、個々人が生活の中で幸せや健康を感じる場面をどう創っていくか、世代間の交流など、皆さんからいただいた意見については、素案で概ねカバーできるのではないかと考えている。先の布石につながるように、盛り込みたい視点などをいただき、集約したい。

(委員)

北米では、高齢者が総合型クラブの中にeスポーツのチームを創るケースが出ている。北米教育eスポーツ連盟のNAS EFという団体が、国を超えて日本でeスポーツの教育効果を施策に盛り込まないかと売り込んできている事例もある。eスポーツは比較的マインドスポーツに近い。囲碁・将棋は子どもと高齢者の交流の場になっているが、それにかなり近い。最近のeスポーツは身体を動かしてのフィジカルeスポーツも広がってきている。昨年コロナ禍でツールドフランスが開催できずに、バーチャルツールドフランスが開催され、バーチャル上でレースをした。その時Zwiftという皆さんも使えるソフトが使われた。施策にDX、society5.0のテクノロジーを入れ込む場合、これを導入すればいいということで終わってしまう場合が多い。技術者からすると、今リリースされているものはその瞬間から陳腐化が始まっている。今の技術を入れるよりも、常に開発し続けることができる人づくりの方が重要である。山口市の情報技術センターでは、大きなスタジオにインターラボという技術者集団がおり、常に開発で市民と一緒に新しい提案をして、イベントでフィードバックを得て良いエコサイクルをしている。つなげる・ひろがるのところにDXとテクノロジーに関する具体的な施策をという話をしたが、最終的には何か作るのではなくて人を創るという話のところにつなげていただくと非常にありがたいと思う。

(会長)

テクノロジーもDXもツールでしかない。まちの政策を考えると、進化するためのマインドを生み出していく人を創るという重要な意見をいただいた。常に開発していく人を創るという視点はぜひ盛り込んでいきたい。

(委員)

防災イベントも含め、身体を動かすイベントはすべて対象として参加ポイントと歩数ポイントを付与し、市民に健康ポイントをためていただく。たまったポイントを協賛店のクーポンに変える。協賛店ではクーポンの一部を寄付する。企業は、働いている人がスポーツをしない理由は時間がないということだと思うので、今よりも少しでも歩くようにして、歩いた歩数ポイントの一部を寄付していただく。情報共有の場として宇治市でクラウドをつくりポイントを表示して、歩

第3回宇治市スポーツ推進審議会 議事要旨

いたポイントを楽しく可視化できるようにする。

(会長)

スキームがあることは重要だと思う。できれば、健康ポイントがどこかに発信して止まるのではなく、市内ですつと還流するものにできればと思う。エコポイント、地域通貨などが様々な地域で取り組まれてきたが、宇治市ならではの健康ポイントの還流のスキームができればいい。

(委員)

宇治市はスポーツ大会の認知度が低いので、宇治市でやっている大会と分かるような名前でもとめると発信しやすい。若者で主流なのがインスタ映えする画像や、プロモーションビデオ。今は素人でもプロのような動画が撮れるようになっているので、この場所で撮ってというインスタ映えスポットを挙げていき、それぞれに明確なハッシュタグを付ける。例えば、「#宇治スポーツ大会」など、何かかっこいい名前にしておくと流行っていくきっかけになるのではないかな。メンションという、見てもらいたいアカウントに導くアカウントを作っておくことも大事だと思う。既に作られていたとしても、まだまだ情報が出てきていないので、全国に知れ渡るためにはハッシュタグやメンションが必要ではないかな。

(会長)

どう発信をしたらよいかと考えるが、市民一人ひとりが発信の仕方をいっぱい持っている。SNSの力を使わない手はない。問題はどう波及させるか。ホームページで掲載すればしっかり発信できていると思込んではいけない。市民一人ひとりが持っている発信力に、いかに仕掛けていくか。発信したい気持ちをくすぐることが大事だと思う。

(委員)

少しでも歩く心がけが進むと健康づくりにつながる。皆興味のあるスポーツとないスポーツがあるが、まずは見に来て、応援しに来てと働きかけて、そこから興味を持って、ゆくゆくは実施するということにつながれば面白い。行動を起こす以前の、見に行くことの情報発信があればいい。

(委員)

歩いたポイントを可視化するのであれば、宇治市の観光名所めぐりに使っていただいてもいい。とにかく循環するシステムを作って、宇治市の課題解決につなげていければと思う。

(会長)

人はいきなりスポーツをするのではなく、興味・関心を持って、やってみようか試行錯誤してからするという心理的プロセスがあり、行動するまで短い人もいれば長い人もいる。「する」にいたるまでをいかにプロデュースするか。見る、関わることの多様性を仕掛ける、行為を起こす前のプロセスをいかに仕掛けるかを政策に盛り込めるといい。

第3回宇治市スポーツ推進審議会 議事要旨

(委員)

行動変容について詳しく説明すると、日本で用いられている行動変容ステージモデルがある。健康のために行動変容を起こすには、大きく分けると無関心期⇒関心期⇒準備期⇒実行期⇒維持期という、5つのステージに分けられる。実際にスポーツをしている人は実行期・維持期にあたる。無関心期から関心期にある方に、どのように働きかけて実際に行動に移してもらうかは、考え方への働きかけが必要。関心期から準備期に、どう背中を押すかの仕組みづくりがすごく重要になる。

(会長)

施策を打ち出すときに、こういった理論ベースで仕掛けていく重要性をおっしゃっていただいた。どの段階の人にどう仕掛けていくかを参考にしたい。

(委員)

テクノロジーをどうスポーツのシーンに入れていくか、普段から課題意識を持っているが、スポーツの方でそういった研究は進んでいない。劇場のシーンにどういう点でテクノロジーが盛り込めるかをまとめた研究が3つあり、1つ目は臨場性、2つ目はお客様との関係を築く双方性、3つ目は運営管理を楽にする自立性となる。スポーツ推進の方向性では、楽しさは最初の臨場性、つながるは双方性、環境づくりや場づくりを楽にしていくのは自立性にあたる。劇場での舞台装置の一元管理をスポーツに落とし込むなら、これまで市内のスポーツ施設の予約システムを個別でやっているものを情報管理も含めて一元化する。先程の健康ポイントも1つの自立性で、環境づくりにつながる。テクノロジーは陳腐化していくので人を見据えないといけませんが、人を育ててどの方向性に進んでいくのかという時に、楽しさの話、つなげる話もちろんあるが、環境整備が絶対に必要になる。まだ研究が進んでいない分野なので、3本の柱が絶対的という検証は進んでいないが、一旦臨場性・双方性・自立性の3つでまとめてみてはどうか。

(会長)

自立性については、政策を考えていくときに、市民一人ひとりが自分の人生や幸せのことを考えて、刺激を受けたことから、自立的に自分の人生をプロデュースしていく方向もあっていい。

(委員)

自立性に加えるのであれば、自動運転とか、これは一企業がするのではなく、政策的に合わせて動かないといけないところだと思う。まちづくりにテクノロジーが絡んでくるときに、最初からスポーツのことを入れてSTEAMSとする考え方で動くのがいいと思う。

(委員)

仕掛けづくりについて。厚生労働省も推進しているのが、ナッジを使った健康づくりプラン。単発では効果があるが、デメリットは継続性がないことで、フレームワークとしてイーストが用いられている。どういうことかという、簡単で、魅力的で、規範性があり、タイムリーであること。やりたいと思った時にそれが目に付いて実行できる仕組みづくりが大切だと言われている

第3回宇治市スポーツ推進審議会 議事要旨

ので、ぜひナッジも活用しながら、今スポーツに関心がない人をいかに引き込むかの設計図をしっかりと描くことが必要だと思う。

(委員)

デジタル化で人づくりが大事だということだったが、人づくりは宇治市でもできることなのか、それともいろんな協力者を募っていかないといけないのか。

(委員)

そういった人材はオンラインでつながって全国に散らばっているので、宇治市に限らず全国になる。横須賀市ではそういう人を誘致する政策も実施している。宇治市では、任天堂を絡めれば、楽しさとテクノロジーと身体をつなげられるのではと思う。

(委員)

宇治市には宇治市食育アライアンスがある。これは既に協賛団体が65団体入っていて、情報発信やイベントなどの活動をしている。そこと協働するだけでも、食育に関係する団体とつながれる。

(委員)

日本の国民性においては、食に関する創造性は凄まじいものがある。そういうものを促す土台づくりは、上手く転用できればテクノロジーを推進していくためのクリエイティビティを促す土台になるのではないか。

(会長)

町の中にはいろんな資源や英知を持っている方がいて、異分野の方とどうやってシナジーを起こしていくか、そんな政策にしたい。今はその場面にいなければならない時代ではなくて、オンラインでつながることもできる。関わり方の質やベクトルは多様にあっても良いのではないか。

(委員)

やはり人と人との関わりをどうするか。まずはイベントに参加する、参加して興味を持てば自分が行動する、そういう仕掛けを作ることが大事だと思う。宇治市には観光地もあるし、商店街の活用も考えられるので、スポーツを通じてというよりも、人が住みやすいまちとしてつながりを持つことを、何か考えられればと思案している。

(委員)

スポーツテストを毎年行い、各年齢の方が市民イベントの中でインボディ測定をすれば、体調管理、健康管理ができるのではないか。来年は頑張ろうというきっかけづくりになると思う。回数や場所、内容はオリジナルでいい。握力や垂直飛びだけでなく、リフティングや平均台、落ちてくるボールをキャッチすることや、自転車でコーンを倒さず行けるかなど交通安全の要素を含むことを組み込めたら、総合的なスポーツとして楽しめると思う。スポーツクラブの方にお手伝

第3回宇治市スポーツ推進審議会 議事要旨

いいいたり、色々なアスリートが測定に関わることも考えられる。

宇治茶、抹茶ビールの商品化や、茶摘みや茶団子づくり体験、抹茶の作法などを伝えていくところがあれば、宇治に行く理由が増えて活性化される。それとスポーツを連携させるという意味で、女子野球のタウン協定をして、黄檗球場で大会を開いていただけたら、全国からたくさんチームが集まるので、年に1回からでもスタートできればと思う。

(委員)

抹茶になる手前のものを石うすで挽いて、それを自分でたてて飲む体験などを実際にやられているところもある。

(会長)

それを京都市民の方でも知らないということは、発信だけでなく発信のつなげ方に問題がある。スポーツテストの発想が面白い。学校でやっているものではない、宇治市を感じるスポーツテストにすれば売りになると思った。市民スポーツまつりでもスポーツテストのようなものをしていたが、リフレミングすると、スポーツテストの新しい価値観が生まれるかもしれない。

(委員)

前回オリンピックでスケートボードという話があり、宇治市でできる場所はないか。

(会長)

徳島大学に勤めていた時に、場所がなくて街中でスケートボードをしていることがきっかけになって、鳴門のウチノ海公園にハーフパイプができた。X系のスポーツを先取りして需要を生み出そうと、都市計画に載せたこともあった。財政もあるのでできるかどうかかわからないが、需要を生み出したり、今ある需要をキャッチすることを書いていくことはありだと思ふ。既存施設を利活用するという発想もあっていい。

(委員)

太陽が丘で毎年体力測定会を実施しているので、上手く活用できるのではないかと思う。宇治市はスポーツ少年団にたくさんの生徒がいて、スポーツ協会も24団体入っているが、紹介する場所がない。体力測定と合わせてカーニバル的な、勧誘にもつなげていくイベントも必要ではないか。紹介する場面や勧誘を促すことは1つのスポーツをする子どもたちを育てることにつながる。

(会長)

重複する資源を有効活用することと、民間企業といかに連携していくかということ。民間企業の活性化につながるだけでなく、行政にはない知識の享受もあるかもしれない。民間と行政、市民との連動制もできるという発想だった。

一旦いただいた意見に基づきながら素案を作成したい。

第3回宇治市スポーツ推進審議会 議事要旨

4. その他

- 事務局より連絡事項

5. 会長職務代理あいさつ

- 本審議会の振り返り

6. 産業地域振興部長あいさつ

- 今後のスケジュールについて説明